

岩手医科大学歯学部口腔病理学教室における 病理組織検査の報告 — 2001年度の集計 —

佐藤 方信, 安保 淳一*, 武田 泰典

佐藤 泰生, 及川 優子

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

(主任 : 佐藤 方信 教授)

岩手医科大学付属病院中央臨床検査部病理部門*

(主任 : 中村 眞一 教授)

(受付 : 2002年 6 月13日)

(受理 : 2002年 6 月24日)

Abstract : Pathological examinations diagnosed at our department in 2001 were statistically reviewed.

There were 641 examinations for 516 cases (Male : 244, Female : 272). Cases were most frequent in patients in their seventh decades (106 cases). In histological classifications of the lesions (mean age \pm SD), odontogenic tumors consisted of 5 ameloblastomas (40.4 ± 25.2), 2 odontomas (20.2 ± 8.0), and one malignant ameloblastoma (33.0). The non-odontogenic benign lesions were 44 fibrous hyperplasias (55.2 ± 18.9), 28 hyperkeratosis (leukoplakia) (55.7 ± 13.4), 7 hemangiomas (65.6 ± 5.9), 6 pleomorphic adenomas (56.7 ± 11.5), 6 osteomas (exostosis, enostosis), 4 papillomas (80.7 ± 7.4), 4 epithelial dysplasias (61.5 ± 11.9) and 3 periapical cemental dysplasias (30.1 ± 13.7). Non-odontogenic malignant tumors consisted of 53 squamous cell carcinomas (68.1 ± 12.6) and 3 verrucous carcinomas (71.7 ± 4.8).

The odontogenic cysts consisted of 45 radicular cysts (45.2 ± 14.3), 21 dentigerous cysts (41.4 ± 19.9) and 8 primordial cysts (29.9 ± 11.3). The non-odontogenic cysts consisted of 44 mucoceles (30.3 ± 22.6), 18 postoperative maxillary cysts (56.1 ± 11.4), 3 incisive canal cysts (54.3 ± 9.9) and 2 dermoid cysts (16.5 ± 2.5).

In addition, 10 Sjögren syndromes (53.9 ± 11.0), 7 lichen planus (69.1 ± 12.9), 26 chronic localized hyperplastic gingivitis (epulis) (60.1 ± 15.7) and 6 dental granulomas (50.5 ± 16.9) were revealed.

Key words : biopsy, statistical report, oral lesion

緒 言

今日, 口腔領域病変の病理組織検査は日本病

理学会認定の口腔病理専門医によって診断されている。口腔病理専門医は大学の口腔病理学教室や大病院の検査部に属し, 病変の診断, 治療

A statistical report of pathological examinations diagnosed in the department of oral pathology of Iwate Medical University in 2001

Masanobu SATOH, Junichi ANPO*, Yasunori TAKEDA, Hirotaka SATO and Yuko OIKAWA
Department of Oral Pathology, School of Dentistry, Iwate Medical University
Division of Clinical Pathology*, Central Clinical Laboratory, Iwate Medical University
19-1 Uchimarui, Morioka, Iwate 020-8505, Japan

Table 1. The monthly number of the biopsy -2001-

Medical Source	Month												Total
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
Inside	37	39	51	32	53	54	50	56	40	58	45	40	555
Outside	9	7	7	7	8	6	8	7	9	8	4	6	86
Total	46	46	58	39	61	60	58	63	49	66	49	46	641

Table 2. Number of frozen section diagnosis -2001-

Sex	Male	Female	Total
No. of cases	21	12	33
Mean age \pm SD	62.0 \pm 10.3	63.4 \pm 18.7	62.5 \pm 14.0

Table 3. Age distribution of case -2001-

Age group	M	F	Total
0-9	8	12	20
10-19	4	22	26
20-29	18	24	42
30-39	17	22	39
40-49	47	41	88
50-59	47	45	92
60-69	55	51	106
70-79	36	42	78
80-89	11	11	22
90-99	1	2	3
Total	244	272	516

方針, 治療効果の評価などを通して歯科臨床の重要な部分に参画している。このような状況から欧米では口腔病理学は臨床歯科医学に組み込まれているところもある。

本学歯学部付属病院の病理組織検査はこれまで著者らの教室の口腔病理専門医によって診断されてきた。これまで我々の教室で扱った病理組織検査を毎年種々の角度から集計し, 報告してきた。今回は2001年度に取り扱った病理組織検査を集計したので, 若干の考察を加えてその結果を報告する。

症例と検索方法

岩手医科大学歯学部口腔病理学教室で2001年(平成13年)に取り扱った病理組織検査の集計にあたり, 対象症例は本学中央臨床検査部病理部門(主任:中村眞一教授)に保管されている

病理組織検査症例ファイルから収集し, 種々の観点から分析した。なお, 症例数(病変数)の集計にあたっては, 患者氏名をパソコン上で五十音順に並びかえ, 症例(病変)が重複して収集されることのないように細心の注意を払った。

また, 症例の出所(臨床科), 年齢, 性などの臨床的事項は組織検査依頼書の記載によったが, 不明の事項についてはそれぞれ各科(診療所)にFAXおよび電話にて照会し, 回答をえた。

結 果

1. 病理組織検査件数と症例数

2001年に著者らの教室で取り扱った病理組織検査は641件であった(Table 1)。このうち, 学内の診療科からは555件, 学外の診療所からは86件であった。学内の診療科から依頼された検査のうち, 553件は口腔外科(第1口腔外科:322件, 第2口腔外科:231件)からであり, 2件は小児歯科からの検査依頼であった。学外からの検査依頼では盛岡市立病院が35件, 猪苗代歯科医院が9件, 松本歯科医院が5件, 八戸赤十字病院が4件, 岩手クリニック水沢が4件であり, その他に21の歯科診療所から29件の検査依頼があった。

月別の検査件数をみると(Table 1), 5月(61件), 6月(60件), 8月(63件), 10月(66件)など暖かい時期に多く, 1月(46件), 2月

Table 4. The number of tumor and tumor like lesion -2001-

Lesion	Male	Female	Total
Odontogenic, benign	2	8	10
Ameloblastoma	2	3	5
Odontoma	0	2	2
Hyperplastic dental follicle	0	3	3
Odontogenic, malignant	0	1	1
Malignant ameloblastoma	0	1	1
Non-odontogenic, benign	59	58	117
Papilloma	1	3	4
Papillary hyperplasia	0	1	1
Hyperkeratosis (Leukoplakia)	19	9	28
Epithelial dysplasia	3	1	4
Fibrous hyperplasia (fibroma)	19	25	44
Irritation fibroma	1	1	2
Drug-induced gingival hyperplasia	1	0	1
Nodular fasciitis	1	1	2
Cemento-ossifying fibroma	0	1	1
Periapical cemental dysplasia	1	2	3
Fibrous dysplasia of bone	0	1	1
Hemangioma	4	3	7
Lipoma	3	1	4
Osteoma (exostosis, enostosis)	2	4	6
Pleomorphic adenoma	4	2	6
Hyperplasia of minor salivary gland	0	1	1
Pigmented nevus	0	1	1
Melanotic macula	0	1	1
Non-odontogenic, malignant	37	29	66
Squamous cell carcinoma	28	25	53
Verrucous carcinoma	3	0	3
Osteosarcoma	1	0	1
Rhabdomyosarcoma	0	1	1
Mucoepidermoid ca.	0	1	1
Metastatic carcinoma (lung cancer)	1	0	1
Lymphnode metastasis of SCC	1	1	2
Adult T cell leukemia	1	0	1
Malignant lymphoma	0	1	1
Sarcoma*	1	0	1
Malignant tumor*	1	0	1
Total	98	96	194

* Precise type not histologically determinable.

(46件), 4月(39件), 12月(46件)など寒い時期には比較的少なかった。

これらの組織検査の中で迅速診断件数(平均年齢±標準偏差)(Table 2)は33症例からの33件(62.5±14.0歳)であった。これらの迅速診断は全て本学付属病院(口腔外科)からの依頼で、

性別では男性症例の21件(62.0±10.3歳), 女性症例の12件(63.4±18.7歳)であった。

病理組織検査症例数(Table 3)は516症例(男:244, 女:272)で女性症例が多かった。年代別には60歳代が106症例で最も多く, 次いで50歳代の92症例, 40歳代の88症例, 70歳代の78

Table 5. The number of cyst and cyst like lesion -2001-

Lesion	Male	Female	Total
Odontogenic	44	33	77
Radicular cyst	26	19	45
Primordial cyst (Odontogenic KC)	4	4	8
Dentigerous cyst	12	9	21
Cyst*	2	1	3
Non-odontogenic	32	38	70
Incisive canal cyst	2	1	3
Postoperative maxillary cyst	11	7	18
Mucous retention cyst	17	27	44
Dermoid cyst	0	2	2
Epidermoid cyst	1	0	1
Thyroglossal duct cyst	1	0	1
Lymphoepithelial cyst	0	1	1
Residual-cyst	0	1	1
Mucocele of maxillary sinus	0	1	1
Total	76	73	149

*Precise type not histologically determinable.

症例となっていた。なお、10歳代が26症例、10歳未満が20症例であり、90歳以上の症例は3症例と少なかった。

2. 組織診断別の症例数と平均年齢

腫瘍および腫瘍様病変と診断した症例 (Table 4) は194症例 (男: 98, 女: 96) であった。この中で歯原性の良性腫瘍ないし腫瘍様病変は10症例で、エナメル上皮腫が5症例 (40.4 ± 25.2歳)、歯牙腫が2症例 (20.2 ± 8.0歳)、過形成性歯小嚢が3症例 (12.7 ± 3.3) であった。悪性歯原性腫瘍は悪性エナメル上皮腫の1症例 (33歳) だけであった。また、非歯原性の良性腫瘍および腫瘍様病変は117症例 (男: 59症例, 女: 58症例) であった。この中では過角化症 (白板症) が28症例 (55.7 ± 13.4歳)、線維性過形成 (線維腫, 線維性ポリープ) が44症例 (55.2 ± 18.9歳) で、これらが比較的症例数の多い病変であった。非歯原性の悪性腫瘍は66症例 (男: 37症例, 女: 29症例) であった。この中では扁平上皮癌が53症例 (68.1 ± 12.6歳) で、悪性腫瘍のほとんどを占めていた。そのほか、疣贅癌が3症例 (71.7 ± 4.8歳) で、非上皮性腫瘍も少数例認められた。確診に至らなかった病変が2症例でみられた。

嚢胞および嚢胞様病変は149症例であった (Table 5)。これらの病変の内訳は歯原性嚢胞が77症例で、非歯原性嚢胞は70症例であった。歯原性嚢胞では歯根嚢胞が45症例 (45.2 ± 14.1歳) で最も多く、次いで含歯性嚢胞が21症例 (41.4 ± 19.9歳)、原始性嚢胞が8症例 (29.9 ± 11.3歳) であった。歯原性嚢胞ではあるが、組織学的に確診できなかった嚢胞が3症例であった。非歯原性嚢胞では粘液貯留嚢胞 (粘液瘤) が44症例 (30.3 ± 22.6歳)、術後性上顎嚢胞が18症例 (56.1 ± 11.4歳)、切歯管嚢胞が3症例 (54.3 ± 9.9歳)、類皮嚢胞が2症例 (16.5 ± 2.5歳) で、類表皮嚢胞 (43歳)、甲状舌管嚢胞 (5歳)、リンパ上皮性嚢胞 (36歳) がそれぞれ1症例であった。

炎症性病変およびその他の病変は173症例であった (Table 6)。この中では慢性炎症性 (肉芽) 組織と診断した病変が33症例と多く、次いで慢性限局性過形成性歯肉炎 (エプーリス) が26症例 (60.1 ± 15.7歳) であった。これらのほかに Sjögren 症候群が10症例 (53.9 ± 11.0歳)、歯根肉芽腫が6症例 (50.5 ± 16.9歳)、扁平苔癬が7症例 (69.1 ± 12.9歳)、慢性上顎洞炎が4症例 (46.5 ± 6.0歳) などであった。また、正中菱形舌

Table 6. The number of inflammatory and the other lesion -2001-

Lesion	Male	Female	Total
Dental granuloma	1	5	6
Chronic periapical periodontitis	0	1	1
Chronic and localized hyperplastic gingivitis (Epulis)	14	12	26
Chronic inflammatory (granulation) tissue	14	19	33
Scar	0	1	1
Pyogenic granuloma	0	1	1
Purulent inflammation	1	0	1
Lichen planus	3	4	7
Lichenoid reaction	1	2	3
Foreign body reaction	0	1	1
Amalgam tattoo	0	1	1
Chronic graft vs. host disease	1	0	1
Pemphigus vulgaris	1	1	2
Supernumerary teeth (dens in dente)	1	0	1
Median rhomboid glossitis	2	0	2
Actinomycosis	1	0	1
Candidiasis	1	1	2
Chronic maxillary sinusitis	2	2	4
Sjögren's syndrome	3	7	10
Atrophy of salivary gland	1	8	9
No significant change in salivary gland	6	12	18
Sialolithiasis	0	2	2
Necrotizing sialometaplasia	0	1	1
Osteomyelitis	0	1	1
Chronic diffuse sclerosing osteitis	1	1	2
Sequester	3	0	3
Normal bony fragment	1	3	4
Chronic lymphadenitis	0	1	1
Amyloidosis	0	2	2
Arthrosis deformans of TMJ	0	1	1
Thrombi	0	1	1
Hairy tongue	0	1	1
No tumor cell invasion	8	1	9
No evidence of malignancy	0	1	1
No diagnosis	4	9	13
Total	70	103	173

炎が2症例(43歳, 49歳), アミロイド症が2症例(70歳, 38歳), 唾石症が2症例(76歳, 28歳), カンジダ症が2症例(67歳, 73歳)であった。

考 察

近年の歯科医療において病理組織検査は必須のものであり, これに関わる口腔病理学は基礎医学の一分野というよりも臨床歯科医学の一端

を担う領域である。病理組織検査にあたって診療サイドと口腔病理専門医の密接な連携が医療の質を向上させる。今日, 我が国には日本病理学会が認定する口腔病理専門医が常在し, 口腔病理組織検査を受け入れる機関は歯科大学や歯学部を中心にして34の機関がある¹⁾。

2001年に著者らの教室で取り扱った病理組織検査件数は516症例からの641件であった。これは2000年に比較して10件増加し, 症例数では15

症例減少していたことになる²⁾。2001年に学内の診療科から依頼された検査件数は555件で、昨年²⁾に比較して3件の増加にとどまった。一方、学外の診療所から受け付けた口腔領域病変の病理組織検査件数は、1998年は83件¹⁾、1999年が55件³⁾であったが、2000年は79件²⁾、2001年は86件と増加していた。本学以外の大学でも学外から依頼される病理組織検査件数は増加の傾向を示している¹⁾。

また、組織検査を依頼した学外の診療所数は1998年¹⁾に18、1999年³⁾には19、2000年¹⁾には23の診療所であったが、2001年は26の診療所からの依頼があり、病理組織検査を必要としている診療所数は逐年的に増加している。学外の歯科診療所においても病理組織検査の重要性が増してきている結果である。病理組織検査をした症例を男女別にみると、1991年は男性が179例で女性が170例⁵⁾と男性症例が若干多かった。しかし、1998年は男性が255例、女性が359例⁴⁾、1999年は男性224例、女性304例³⁾、2000年は男性255例、女性276例²⁾と、近年、女性症例が多い傾向にあった。今回集計した2001年の病理組織検査でも男性が244例であったのに対して、女性症例が272例と多かった。この要因として女性に多い Sjögren 症候群の診断にあたり、口唇腺を病理組織学的に検索する症例の多いことが第一に挙げられる。

また、これまでの迅速診断件数は1998年が33件⁴⁾であったが、1999年は46件³⁾と増加し、2000年は22件¹⁾に減少していた。しかし、今回集計した2001年の迅速診断件数は33件と若干の増加がみられた。

良性の歯原性腫瘍ないし腫瘍様病変ではエナメル上皮腫が最も多くみられたが、これは2000年²⁾および1999年³⁾の集計でもみられた傾向であった。今回の集計で歯原性悪性腫瘍が1例みられたが、これは2000年²⁾および1999年³⁾の集計ではみられていない。良性の非歯原性腫瘍ないし腫瘍様病変では過角化症（白板症）と線維性過形成（線維腫）が特に多くみられたが、これらの病変は2000年²⁾、1999年³⁾、1998年⁴⁾の組織検

査の集計でもみられていた特徴である。

また、今回の2001年の集計で、悪性の非歯原性腫瘍の中では扁平上皮癌がそのほとんど（80.3%）を占めていたが、このような傾向は2000年（88.3%）²⁾、1999年（88.2%）³⁾、1998年（75.4%）⁴⁾の組織検査の集計でも認められていた。扁平上皮癌と組織診断した症例数を年度別にみると、1991年度は27症例⁵⁾と少なかったが、1998年度は49症例⁴⁾、1999年度は45症例³⁾、2000年度は53症例²⁾と増加していた。因みに我が国における舌癌による死亡者数は1971年が427例、1980年が550例、1990年が695例、1995年が902例、1997年が993例と逐年的に増加し⁶⁾、1998年は1,023例、1999年は1,077例⁷⁾となり、この30年間に2.5倍以上にも増加している。

近年の病理組織検査にみる口腔扁平上皮癌症例の平均年齢は、2000年度が65.8±11.0歳²⁾、1999年度が66.0±11.7歳³⁾で、1998年度は60.6±14.8歳⁴⁾と若干低くなっていたが、2001年の症例の平均年齢は68.1±12.6歳と高くなっていた。しかし、1991年に口腔扁平上皮癌と診断した症例の平均年齢は65.0±11.5歳⁵⁾であり、著者らの教室で扱った舌癌症例の年度別の平均年齢に一定の傾向は明らかではなかった。

歯原性嚢胞の中では歯根嚢胞が最も多かったが、これまでも認められてきた傾向である。過去5年間の嚢胞の集計で歯根嚢胞の次に多かったのは原始性嚢胞であったが²⁾、今回の集計では含歯性嚢胞が多かった。これらの歯原性嚢胞の平均年齢では歯根嚢胞が最も高齢で、含歯性嚢胞の平均年齢がこれに次ぎ、原始性嚢胞の症例の平均年齢は最も低かったが、このような特徴は2000年²⁾の症例でも認められていた。

組織学的に確診できなかった歯原性嚢胞が3例であったが、これらの嚢胞では検査に出された組織片が断片的であったり、臨床所見が明確でなかったことなどによる。

非歯原性嚢胞のほとんどは粘液貯留嚢胞（粘液瘤）と術後性上顎嚢胞から成っていたが、過去の症例でもこのような傾向がみられている²⁻⁴⁾。今回の集計では貯留嚢胞（粘液瘤）の症

例の平均年齢は30.3歳と低く、術後性上顎嚢胞の症例の平均年齢は56.1歳とこれより高かった。このような特徴は過去の症例²⁾でもみられた事実である。術後性上顎嚢胞と診断したのは1991年は32症例³⁾であったが、1998年は29症例⁴⁾、1999年は22症例³⁾、2000年は20症例³⁾とほぼ逐年的に減少し、今回集計した2001年は18症例と少なくなっていた。術後性上顎嚢胞は上顎洞蓄膿症の根治手術の合併症であり、我が国では比較的発生頻度の高い病態である。今日、慢性副鼻腔炎は軽症化し、手術法が根本手術から保存的手術法である鼻内手術に向けられてきている⁵⁾事も減少の要因として推測できる。

扁平苔癬は過去3年間²⁻⁴⁾で46症例(男性:11, 女性:35)みられ、性別には女性症例が圧倒的に多いが、今回集計した2001年は7症例(男性:3, 女性:4)であった。また、Sjögren症候群は9症例(男:3, 女:6)みられた。Sjögren症候群の診断基準(1999)⁶⁾の一つに口唇腺組織あるいは涙腺組織の生検病理組織検査があり、この目的のため口唇腺の組織検査がなされている。Sjögren症候群と診断した症例を過去3年間についてみると、性別では男性が8症例、女性が53症例で、圧倒的に女性症例(86.8%)が多く、年度別には1998年は27症例⁴⁾、1999年は20症例³⁾、2000年は14症例³⁾と逐年的に減少し、2001年は9症例と一層少なくなっていた。

今日、歯科医療の質の向上にむけて日常の臨床の場で口腔病理組織検査が一層有効に利用さ

れることが望まれる。

結 語

岩手医科大学歯学部口腔病理学教室にて2001年に取り扱った病理組織検査件数は516症例からの641件であった。これらの症例を種々の観点から検討し、若干の考察を加えて、その結果を報告した。

文 献

- 1) 佐藤方信, 佐藤泰生, 及川優子: 岩手医科大学歯学部口腔病理学教室における病理組織検査の報告 - 2000年度の集計 -, 岩医大歯誌, 26: 188-194, 2000.
- 2) 高木 實, 向後隆雄, 久山佳代, 瀬戸院一, 田中陽一, 朔 敬, 程 瑠, 鈴木 誠, 宮武光吉, 山本浩嗣, 福山 宏: 一般歯科臨床における口腔病理検査の意義と有用性, 歯界展望, 97: 887-897, 2001.
- 3) 佐藤方信, 佐藤泰生: 岩手医科大学歯学部口腔病理学教室における病理組織検査の報告 - 1999年度の集計 -, 岩医大歯誌, 25: 191-197, 2000.
- 4) 佐藤方信, 佐藤泰生: 岩手医科大学歯学部口腔病理学教室における病理組織検査の報告 - 1998年度の集計 -, 岩医大歯誌, 24: 233-239, 1999.
- 5) 佐藤方信, 佐藤泰生, 藤井佳人: 本学歯学部口腔病理学教室における病理組織検査の報告 - 1991年度の集計 -, 岩医大歯誌, 18: 136-142, 1993.
- 6) 佐藤方信, 阿部洋司, 佐島三重子, 大津匡志: 日本病理剖検輯報に基づく舌癌剖検症例の統計的検討(第V報), 岩医大歯誌, 25: 80-90, 2000.
- 7) 厚生省大臣官房統計情報部編: 人口動態統計, 下巻, 平成9年~10年, 財団法人厚生統計協会, 東京, 1973-1988頁.
- 8) 神田 敬: 副鼻腔炎, 日野原重明, 阿部正和監修: 今日の治療指針, 1998年版, 医学書院, 東京, 854頁, 1998.